

13. 傍正中視床梗塞における オレキシン神経への影響 についての検討

越谷病院神経内科

宮本智之, 岩波正興, 小川知宏, 滝口義晃,
横田隆子
看護学部看護医科学(病態治療)・大学病院睡
眠医療センター
宮本雅之

【目的】オレキシン神経は, 視床下部背外側部に局在することが動物実験では示されている。同部位の二次性の障害で過眠症状を呈する原因として, 脳腫瘍, 多発性硬化症, 脳血管障害など報告されている。今回, 同部位に局在病変を呈する傍正中視床梗塞症例における髄液オレキシンを測定し, 病変との関連を検討したので報告する。

【方法】対象は当大学と当大学越谷病院に両側傍正中視床梗塞で入院し, 髄液オレキシン値を測定した3例(男性2例 女性1例)。臨床症候, 血液検査, 頭部MRI所見, 臨床経過についてカルテを参考に後方視的に横断調査した。

【結果】両側傍正中視床病変のみの症例では, 髄液オレキシン値は正常範囲であった。両側視床病変と中脳病変の両者を呈した症例では, 髄液のオレキシン値は低値を示した。髄液オレキシン値が低値を示した症例は, 慢性期のQOLが悪く予後不良の症例であった。

【考察】両側の傍正中視床梗塞において中脳病変を伴う症例では伴わない症例に比べて, 髄液オレキシン値が低く, 慢性期の機能予後に関連がみられた事実は, オレキシン作動神経が睡眠覚醒神経機構にかかわるばかりでなく, 自律神経調節, 食行動など日常生活に関与する神経機構に投射しているためと考えられる。

【結論】オレキシン作動神経の局在部位は, 視床と中脳との中間に存在することが示唆される。傍正中視床梗塞におけるオレキシン神経障害の程度と脳梗塞の機能的予後への影響についての関連が示唆される。

14. Prader-Willi 症候群の遺 伝子型による心理行動症 状の比較検討

¹⁾ 越谷病院こころの診療科

²⁾ 越谷病院小児科,

³⁾ 中川の郷療育センター

尾形広行¹⁾, 佐山真之¹⁾, 井原 裕¹⁾,
村上信行²⁾, 城戸康宏²⁾, 綾部匡之²⁾,
永井敏郎³⁾

【目的】プラダー・ウィリー症候群(PWS)は筋緊張低下, 過食に伴う高度肥満, 糖尿病, 発達遅滞, 行動異常などを呈する奇形症候群である。原因は染色体15q11-13に集簇するインプリンティング遺伝子の異常で, 欠失, 片親性ダイソミー(UPD)などがある。

本研究では, 日本人PWSの遺伝子欠失とUPDによる知的能力と自閉傾向, ADHD傾向を比較検討した。小学生を児童期, 中学生以上~20歳未満までを思春期と分類し, 児童期での欠失とUPD, 思春期での欠失とUPDを比較検討した。

【対象と方法】獨協医科大学越谷病院小児科にてPWSと診断を受けた45例に知能検査(WISC, WAIS)を実施した。また養育者に広汎性発達障害評定尺度(PARS), 注意欠陥・多動性尺度(ADHD-RS)を実施した。児童期が22例(欠失が16例, UPDが6例), 思春期が23例(欠失が16例, UPDが7例)であった。

両群間の比較は, Mann-Whitney U-testを用い, $P < 0.05$ を有意とした。

【結果】知的能力は, 児童期, 思春期ともに欠失がUPDよりも全IQが有意に高かった。

自閉傾向は, 児童期では欠失とUPDにおいて有意差はなかった。思春期ではUPDが欠失よりも全得点と下位項目の対人スキル得点, 過敏性得点で有意に高かった。また思春期のUPDは, PARS全得点の標準的基準であるカットオフ値を超えた。

ADHD傾向は, 児童期, 思春期の欠失, UPDともにADHD-RSのカットオフ値未満だった。

【考察】自閉傾向は, 児童期では欠失とUPDに差はなかったが, 思春期ではUPDが欠失よりも強くなった。その傾向により, 思春期のUPDにおいては問題行動がより多くなることが推測された。

【結論】養育者や関係者らは, PWSの思春期UPD型の問題行動には, 自閉傾向を考慮に入れながら対応することが必要だと思われる。